

## 後期ビザンツ帝国に於ける「皇族」：14世紀のアサニス家系譜に関する考察

平野智洋（女子美術大学）

ビザンツ史に於いて、14世紀後半という時代は、本格的な歴史叙述の欠落による情報不足の時代であり、また同世紀半ばの内乱と外敵の侵入による、帝国領土の縮小・国家・社会等の解体・変動の時代であった。有力者階級、殊にパレオロゴス家皇室との親族関係を持ち「皇族」として帝国の政治史を主導した家門に於いても、15世紀に残る同姓保有者との間の「断絶・隔絶」が見出される。この事は、一方では実際に家系の断絶を証言するものであるが、他方ではなお存続していた家系の、再構成されるべき繋がり存在を示唆するものである。

本稿／本報告では、13-15世紀にかけて「皇族」としての地位を維持したアサニス家（' Ἀσάνης- Asanis: 旧ブルガリア王家）について、上記の観点から14世紀中葉前後の断絶を埋め、家門を取り巻く政治史や人的関係について再考する事を目的としている。

具体的には、皇帝ヨアニス6世カンダクジノス(Ioannis VI Kantakouzinus, 1347-1354)の「義兄弟」マヌイル・コムニノス・ラウル・アサニス(Manouil Komninos Raoul Asanis)や、ヨアニス5世パレオロゴス(Ioannis V Palaiologos, 1341-1391)の「叔父」にして「従兄弟」ヨアニス・アサニス(Ioannis Asanis, d. 1386?)ーコンスタンディノス・アサニス(Konstantinos Asanis, d. 1415)兄弟を取り上げ、先行研究による系譜再構成の成果と問題点を整理する。その上で、アサニス家成員との交友があった文人ディミトリオス・キドニス(Dimitrios Kydonis)の書簡等をはじめとする叙述・文書史料、また通称'Lincoln Typikon'の挿絵銘文などの情報によりつつ、系譜の再構成を試みる。更に彼らの史料上での描かれ方が、同時代の政治・社会の動向の中でどのような意味を持っていたのかも併せて考察する。

上記三者はほぼ常に政界の中枢に近い地位を占め続けており、系譜の再構成は彼ら自身の政治活動と行動選択は勿論、その親族・姻族であるラウル家・ツァンプラコン家等との人的関係を考察する上で一つの材料を示す事に繋がる。また個別の考察を超えて、後期ビザンツに於ける複合姓の解釈、それを通じて個々人が示そうとした社会的地位、実際の政治史に於ける個々人の関与や人的関係について、改めて考える手がかりを提示する事を期している。